第４章　明治～終戦までの坂田

明治維新時の坂田の農民

明治維新を迎えたとき、坂田村は戸数七六戸であった。まだ海苔養殖も本格化していなかったし、坂田の人々は灌漑の悪い田畑をあえぎながら耕作していた。貧しい半農半漁の村だったのである。

明治元年、坂田村は安房上総県の所轄となった。久留里藩士柴山典（文平）が知県事となって〝御一新〟を迎えた。

明治維新後の日本は近代国家形成へ向かって富国強兵の政策をひた走りに走った。行政はしばしば試行錯誤し、一般庶民はとまどうことも少なくなかった。

明治元年に安房上総知県事の所管となった坂田は、翌二年十一月には宮谷（みやざく）県（県所・山武郡大網白里町、柴山典権知事）の設置により、同県の所管へと指定替えされた。それもつかの間、同年の六月には版籍奉還が実施され、明治四年七月の廃藩置県によって、

上総・安房地方には一六の県が設けられ、十一月、一つの県に統合、木更津県（県所・木更津、県令柴原和）となり、坂田は木更津県の所管に入った。

そして明治六年六月、木更津県と印旛県が合併し千葉県が設置されるに及び、千葉県の所管となった。

その後、明治政府は西南戦争を平定しいよいよ国家体制を固め、明治十一年に府県制をまた改革、県制の下に郡制を敷き、郡区町村編成に着手し、統一行政の組織化をはかった。『君津町誌』（上巻）によれば、

「明治十一年十一月、望陀、周准、天羽の三郡をもって一画とし、郡役所を木更津に置き、望陀周准天羽郡役所といい、郡長之を管轄した。初代郡長板倉胤臣、二代平山晋であった。郡内を三大区に分ち望陀郡が第一大区、第二大区、周准天羽郡が第三大区となった。そしてその下を小区に分った」とある。

すなわち、木更津村の郡役所の発足により、坂田は正式には千葉県周准天羽郡第三大区第一小区に所属することになった。小区にはそれぞれ戸長、副戸長が置かれることになり、かつての庄屋（名主）、年寄などの村役人に替わって村々の行政をとりしきることとなり、第三大区第一小区の戸長には坂田の坂井四郎治（「明石醤油」十四代目当主）が就任した。

当時の坂田の世帯数は約八〇戸。人口もわずか六〇〇人足らずの小村にすぎなかった。〝明治御一新〟におけるはなはだしい変転の時勢のなかにあって、当時の村人たちは四〇数町歩の田畑を鍬と鋤で耕やし米麦を作り、あるいはささやかな浅海漁業で生計をたてていた。

■廃藩置県

明治四年（一八七一年）七月、明治新政府が中央集権体制確立のために行なった政治変革。戊辰戦争のあと、明治新政府は版籍奉還、藩制改革によって藩体制の解体をすすめたが、明治四年七月、在京の諸藩知事を召集して廃藩を命じ、新たに東京、大阪、京都の三府と三〇二の県を設置した。これにより、藩知事に代わって、府には知事が、県には県令が派遣された。その後、同年十一月には府県の統合が行なわれ、三府七二県となった。

しかしこの頃から坂田村にも新しい「なりわい」(生業)が芽生え、人々は積極的にそれに参画していった。すなわち海苔養殖業であった。文政のころから小糸川河口では海苔養殖業が盛んであった。それまでの海苔養殖は塩分の少ない河口が最適であり、河口のない坂田海岸はその恩恵からはずされていた。ところが明治十三年、それまでのさまざまな研究の結果、海苔養殖は塩分の多い海岸でも可能となった。小糸川河口の人々をせん望の眼差しでながめていた坂田の農民たちにとって、この研究開発はまさに一条の灯となって輝いたのであった。耕地の灌漑に恵まれず年々の収穫が芳しくなかった彼らはむしゃぶりつくように海苔養殖業に飛びついた。そして新しい「なりわい」は坂田の人々の期待に背かなかった。生産技術の開発にかけた人々の努力で海苔養殖による収益は日に日に向上し、坂田村はようやく活気づいてきた。

この間、明治七年五月には、長福寺の一隅を借り受けて、小規模ながら坂田尋常小学校が設置されて、義務教育の灯が点じられた。学区は坂田と、隣接する大和田。明治十一年にはさらに人見校と畑沢校を坂田校に合併した。

周西村の誕生

明治二十一年、明治政府は、富国強兵を国策として、徴兵制度の確立をふまえた地方自治の改革に着手した。その年の四月には市制および町村制が公布され、六月には町村合併への訓令が発令された。

それにもとづいて坂田村も明治二十二年四月、隣接する大和田、人見、中野、久保、

台の村々と合併し、「周西村」の誕生をみた。

この六カ村はかつて中世においてともに秋元荘周西郷に属していた。そうしたいきさつもあり、なかば強制的な合併ではあったが、さしたる問題もおこらず、平穏のうちに成立した。合併後、ただちに村会議員選挙が行なわれた。

選挙は法律に定められた等級選挙であった。すなわち、満二五歳以上で二年以上の住民を前提条件として、地租または直接国税を二円以上納入したものを「公民」といい、市町村の選挙に参与できるのは、この「公民」に限られていた。

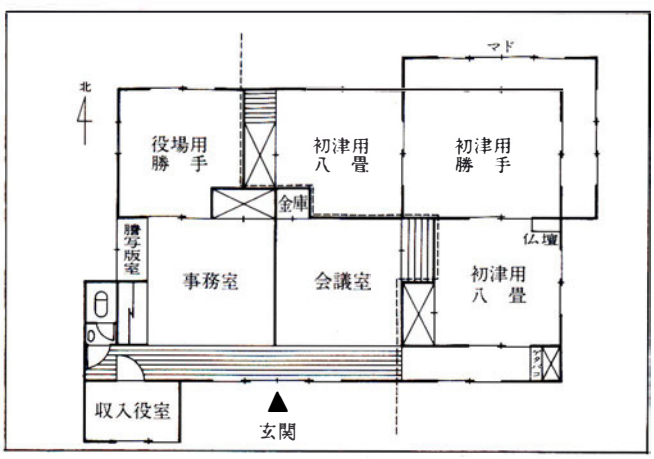
議会議員は市が一、二、三級と、町村では一、二級と納税額によって分けられ、任期は六年。三年ごとに半数が改選された。

当時の議員はいわば名誉職であり、現在とちがって、町村会議長は町村長が兼ねた。その後、大正十五年六月、市制町村制の改正があり、納税額に基づいて一票の重みに差をつけた等級選挙が廃止され、平等選挙となった。

周西村の初代村長は坂田地区の坂井四郎治が選出された。助役には久保地区の礒貝紋平が選ばれ、周西村は、その歴史の第一歩を踏み出した。

村役場は、坂田八五八番地にある初津正之助家の一部を借りて事務が開始された。初津家は江戸時代、坂田周辺一帯を知行とする旗本・小笠原氏の後裔であり、その関係から、村役場所在地として選ばれたものと思われる。周西村はその後、昭和一八年四月、八重原村と合併し君津町が誕生するまで、約五〇年の間つづくが、歴代村長は別表のとおりであった（助役名は下段）。

しかし新生周西村の環境は決して良好とはいえなかった。なんといっても生計の主力



周西村役場のおかれた初津正之助宅母屋間取図

■歴代周西村村長（明治22年5月～昭和18年3月）

就任年月日	氏名	出身地	就任年月日	氏名	出身地
明治22・5・11	坂井四郎治	坂田	大正12・3・1	水越福太郎	坂田
明治26・12・21	金田　盈蔵	久保	大正13・12・4	天笠作十郎	人見
明治27・11・9	坂井四郎治	坂田	昭和2・7・12	鈴木吉兵衛	中野
明治28・5・29	鈴木吉兵衛	中野	昭和2・8・17	鈴木吉兵衛	中野
明治31・10・20	高橋安太郎	人見	昭和3・5・18	茂田捧太郎	大和田
明治32・3・23	坂井四郎治	坂田	昭和4・11・9	榎本竹次郎	中野
明治33・5・30	金田　盈蔵	久保	昭和5・2・14	榎本竹次郎	中野
明治34・4・20	守　八郎治	人見	昭和6・2・6	坂本藤右衛門	久保
明治36・3・18	大野甚太郎	中野	昭和7・1・4	榎本　政吉	人見
明治4・12・40	大野甚太郎	中野	昭和9・5・18	能重房次郎	県属
明治44・4・18	保坂亀次郎	久保	昭和9・5・21	守　吉司	人見
大正4・4・19	坂井四郎治	坂田	昭和13・7・20	坂井四郎治	坂田
大正8・4・17	榎本竹次郎	中野	昭和14・5・1	保坂亀次郎	久保

である農業が溜池や天水に頼るという決定的な体質をもっており、広大で肥沃な耕地にもかかわらず、いぜん旱魃に悩まされていた。

そして明治二十七年には未曽有の大旱魃に見舞われた。田圃一帯の作物は枯死し、いなごが繁殖、大飢饉に遭遇した。困窮した小糸川北側沿線の農民は、小糸川から水を揚げるほかないとして坂田、久保、李師（むくし）の三部落は、久保水利組合を結成し、明治二十八年、久保南陂に大水車の架設工事に着手した。建設費二四〇〇円であった。このとき坂

■歴代周西村助役

就任年月日	氏名	備考
明治22・5・11	磯貝　紋平	
〃26・9・6	茂田治郎平	
〃28・8・30	中野　金治	
〃31・4・4	大野甚太郎	
〃36・4・20	青澤　吉弥	坂田
〃40・5・28	保坂亀次郎	
〃44・5・15	坂井四郎治	坂田
大正4・7・21	守　太助	
〃4・11・8	榎本竹次郎	
〃5・11・25	佐野清太郎	
〃8・8・30	守　太助	
〃11・3・22	水越福太郎	坂田
〃12・6・14	天笠作十郎	
〃14・3・18	茂田捧太郎	
昭和3・11・8	守　治郎助	
〃5・6・5	坂本藤右衛門	
〃7・1・14	岡崎彦次郎	
〃10・5・31	保坂常次郎	
〃13・3・8	平野仁三郎	坂田

田はまた別個に坂田水利組合を結成し、この難局に対応した。

一方、海岸での海苔養殖も本格化し、明治三十五年十月十四日には坂田漁業組合が設立され、栗原惣吉が組合長に就任した。組合員は八七名、明治三十五年十一月七日には正式に認可となった。

日清・日露戦争の従軍者

明治政府のなかには、朝鮮に積極的進出を促す征韓論がおこっていた。しかし、それは明治八年の日鮮修好条約の締結で一応しりぞけられ、朝鮮の自主独立は認められた。

ところが、清国は朝鮮へ対し猛烈な圧力をかけてきた。日本と清国の緊張は頂点に達し、ついに両国は出兵、衝突をみるにいたった。

豊島沖海戦後、明治二十七年七月、日本は清国に対して宣戦布告、黄海海戦で大勝した。そして大連、旅順などを占領し、明治二十八年四月に下関で講和を結んだ。日本は戦費二億円、一万七〇〇〇人の犠牲者を出した。

日本は清国から三億円の賠償金を得て、さらに台湾を植民地として統治することになった。

「周西村」の従軍者は七名。そのうち坂田からは水越福太郎、秋元熊次郎、苅込常吉の三名が出征した。坂田から初めての海外出征者であり、悲壮な決意で故郷を出立した。

つづいて明治三十七年二月には日露戦争が起こった。「赤い夕陽」の満州の曠野で、あるいは「天気晴朗」な日本海において、およそ一年七カ月にわたって激戦が展開された。

■坂田選出周西村村会議員

A、等級選挙時代（明治22年～大正15年）

(1)一級当選者（定員12名）

氏名	就任年月日	退任年月日
坂井音次郎	明治22・4・23	明治24・12・5
水越　広吉	〃25・4・1	〃31・3・31
坂井四郎治	〃25・4・1	〃31・3・31
坂井源次郎	〃31・4・1	〃37・3・31
秋元　徳蔵	〃31・4・1	〃37・3・31
栗原　惣吉	〃37・4・1	〃37・4・13
牧野信太郎	〃40・4・1	大正2・3・31
安藤　忠蔵	大正2・4・1	〃6・3・31
牧野信太郎	〃2・4・1	〃6・3・31
苅込　常吉	〃6・4・1	〃10・3・31
牧野信太郎	〃6・4・1	〃10・3・31
牧野信太郎	〃10・4・1	〃14・3・31

（注）大正2年までは任期6年、以後4年。

(2)二級当選者（定員12名）

氏名	就任年月日	退任年月日
坂井四郎治	明治22・4・23	明治25・3・31
秋元　徳蔵	〃25・4・1	〃31・3・31
坂井四郎治	〃31・4・1	〃32・4・14
坂井四郎治	〃34・4・1	〃40・3・31
安藤　忠蔵	〃37・4・1	〃43・3・31
坂井源次郎	〃40・4・1	大正2・3・31
安藤　忠蔵	〃43・4・1	〃2・3・31

旅順攻略戦、奉天、遼陽の大会戦で日本軍は死闘のすえ、ようやくにして勝利をかちとった。そして、この勝利を契機としてアジアにおける新興国家としての名声を高め、列強の一員として国際舞台へ登場することになった。が、その犠牲も甚大であった。

「周西村」の従軍者は四一名を数えた。坂田出身の兵士は一一名で、それぞれ抜群の功績をたてたと評判になった。そのうち広瀬庄之助は満州の遼陽会戦で右腕を失い、左記の三名が名誉の戦没を遂げた。

栗原惣吉　明治九年七月二十日生まれ。軍曹。坂田漁業組合初代組合長をつとめていたが、日露戦争に従軍、明治三十八年四月六日、北満州鷲鷺樹にて壮絶な戦死を遂げた。

平野吉之助　明治七年八月二十日生まれ。輜重輸卒。明治三十八年十月二十日、韓国砂作定立病院にて戦病死する。

安藤萬治　明治十八年八月九日生まれ。二等卒。明治四十年一月七日、習志野騎兵第十四聯隊に勤務中病死する。

そのほかの従軍者は、水越福太郎、苅込常吉が日清戦争に次ぐ再度の出征者。そして秋元猪次郎、山田太助、広瀬庄之助、色部勘治、安藤栄三郎、平野喜代治の八名であった。いずれもいまは亡き人々であるが、日清、日露の両戦争に従軍した水越福太郎は次のような従軍日誌を残している。

〈明治二十七年〉

八月三十日午后五時日清戦争が開戦され、同日召集令状を受領、翌三十一日午前九時、

坂井四郎治	大正2・4・1	〃6・3・31
坂井四郎治	〃6・4・1	〃10・3・31
坂井四郎治	〃10・4・1	〃14・3・31
坂井四郎治	〃14・4・1	昭和4・3・31
広瀬傳次郎	〃14・4・1	大正15・4・27

B、等級選挙廃止後（昭和4年～昭和18年）

氏名	就任年月日	退任年月日
安藤忠兵衛	昭和4・4・1	昭和5・9・27
苅込和三郎	〃4・4・1	〃8・3・31
坂井　豊三	〃4・4・1	〃8・3・31
秋元　条吉	〃8・4・1	〃12・3・31
安藤　敬三	〃8・4・1	〃12・3・31
坂井四郎治（幼名豊三）	〃8・4・1	〃12・3・31
秋元　条吉	〃12・4・1	〃17・5・21
秋元猪次郎	〃12・4・1	〃17・5・21
坂井音三郎	〃17・5・22	〃18・5・14
苅込和三郎	〃17・5・22	〃18・5・14

十円十五銭を所持して出発。
九月一日、第一師団輜重兵第一大隊補充中隊に編入される。
九月二十六日、海外出征の目的を以って広島を出発、同日十時、宇品港にて乗船、二十七日大風雨海上大浪にして船中大いに困難。
三十日朝、朝鮮大同湾着。
十月十二日大連着、十四日柳橋屯に上陸、二十七日旅順の戦闘に参加。
十一月二十二、三日、金州街道に敵の敗兵多数、これを追撃、敵兵大いに敗走せり。
皇后陛下より防寒用として真綿二十八貫目下賜せらるるとの命令を受領。
十二月二日天皇陛下より旅順は清国の北門、よくこれを占領したと賞される勅語を賜わる。
〈明治二十八年〉
一月元旦、晴天にして大いに暖かく休憩、金州地民家に宿舎す。一月二日、酒二合、するめ一枚、干パン二箇、餅四箇下さる。蓋平、金州等の守備。
六月五日、大連湾出帆、同八日宇品港上陸、十三日復員に付解散を命ぜられる。
十一月十八日、日清戦役の功により金拾五円を賜わる。
日露戦争についても細々と記録しているが、ここではその最後の部分だけ抜粋する。
明治三十九年一月一日、天気晴朗にして寒し、午前九時六社屯大隊本部前芝地に整列、大隊長並に副官臨時年賀式挙式す。九時半解散、六社屯滞在。十三日凱旋のため六社

明治の軍服姿（色部太吉）

屯出発、十八日大連出帆、二月二日佐倉に凱旋、四日復員下令。
二月六日、晴天北風静かにて午前越前堀より乗船、十一時海上無事桜井に上陸、町村赤十字社委員及び部落一同、周西小学校生徒及び各職員の最も熱誠なる歓迎を受けて午后二時帰宅す。
四月一日、戦役の功により勲八等白色桐葉章及び金弐百円下賜、同日従軍記章授与さる。

明治四十三年の大豪雨と大正六年の台風被害

坂田は気候温暖にして、自然に恵まれ、住みやすい土地である。しかし、部落の居住区域と海岸との間には小高い丘陵地帯が連なり、住居に迫る山容は高くはないが、ところによってはかなり急傾斜であって、大豪雨の時などはガケ崩れ、浸水の被害に見舞われてきた。

とりわけ、明治四十三年八月中旬には集中豪雨が狂ったように一週間も降りつづいて、八月十一日、ついに丘陵のあちこちを崩壊させ、突如として山崩れが発生した。山裾に点在する家屋は見る間に土砂におおわれてしまった。人々は逃げる術も失なわれ、思わぬ大惨事となったのである。

倒壊した家屋（母屋）八戸、死者は実に一二名にのぼってしまった。

歴史的にみれば、天明の飢饉や安政の大地震といった災害があり、坂田でも痛ましい被害はなくはなかったが、このように多くの死者を出したのは、このときがおそらく初めての経験だったと思われる。

■第一次世界大戦（大正三年）の従軍者

坂田からは広部弥三郎が中国の青島攻略に出征し活躍した。その後のシベリア出兵には小野近之助が従軍した。

そのときの倒壊した家屋と犠牲者は次のとおりであった。そのほか、家屋の小破は各所に発生した。

■明治四十三年の豪雨被災者

世帯主	小字名	死亡者数	住家被災状況
牧野巳之吉	花の井	三	全壊
坂井寅松	浜大津	六	全壊
広部弥三郎	志毛	一	全壊
水越むめ	谷	一	坂井寅松家にて被災
平野楽蔵	原	一	平野仁三郎家にて被災
小野近之助	大作		全壊
青沢半蔵	吉ケ作		全壊
平野仁三郎	加知畑		全壊
安藤伊之吉	志毛		全壊
広部吉蔵	仲町		半壊

大正六年九月三十日には台風と津波が坂田を襲った。ちょうどその季節、坂田は稲刈りの直前で、また海苔簀の建て込みの時期で、一年のうちで最も多忙のときであった。朝からなんとなく無気味な空模様で、北東からの風にまじって雨が降りはじめていたが夜に入ると風は次第に風力を増し、夜半には荒れ狂う台風と化してしまった。

最も心配したことだが、台風は北西風をまき起こし津波を呼んだ。本名輪河岸の船溜りが大破し、波打ぎわに荷出しされていた建て込み前の木簀はことごとく流出した。木更津ではこのとき津波が打ちよせ、死者六名、住家流出一七戸、家屋の全半壊九〇戸とい

う大被害をこうむったけれども、坂田は本名輪の本間佐吉と錦織長吉の両母屋が倒壊したにとどまった。

このため海苔簀の建て込みは大幅に遅れてしまったが、翌年の収穫にはひびかなかった。

内房線の開通と坂田の文明開花

日本で初めて鉄道が走ったのは、明治五年の九月、新橋ー横浜間である。その後、鉄道は大量輸送手段としてその便利さが着目され、明治二十年代以降、鉄道建設が活発化した。

千葉県では、明治二十七年七月、市川ー佐倉間に鉄道が敷設され、同年十二月、東京の本所ー市川間が開通した。

明治四十三年、鉄道敷設法の改正によって、蘇我ー木更津ー北条ー勝浦ー大原という環状線構想が立てられ、大正元年八月、蘇我ー木更津間が、翌大正二年六月、大原ー勝浦間が開通した。次いで木更津ー上総湊間（大正四年）、ー安房北条（大正八年）、ー安房鴨川（大正十四年）が逐次開通し、昭和四年にようやく勝浦と接続するに至った。この間、大正元年には久留里線が木更津から久留里まで開通している。

これら鉄道の敷設に当たっては、地域開発のために積極的に誘致しようとする市町村がある反面、〝陸蒸気〟は火災や煙害など災害をもたらすとして鉄道敷設に反対する市町村があり、線路の敷設にはどこでもさまざまな紆余曲折が伴っていた。木更津から上総

■内房線敷設に伴い中野区と交した契約書

契　約　書

君津郡周西村坂田区総代人秋元国太郎外弐人
仝村中野区総代人鈴木吉兵衛外弐人協定スル事項左ノ如シ

一、鉄道線路敷設ニ付坂田区用地排水ヲ目的トシ坂田字鰯原地先ヨリ仝村中野字蒲田九拾四番ノ四、九拾三番ノ四、九二番ノ四ヲ経テ小学校裏ニ通シ幅員六尺ノ水路ヲ新ニ設置シ中野区ハ之レニ同意スルコト

二、前号排水路設置ニ付キ中野区田地ニ被害ナキヲ主ト為ス可シ

三、第二号ニヨリ中野字御丈弐拾参番地先ヨリ小糸川ニ至ル迄ノ悪水路ヲ浚渫シ若シクハ幅員ヲ拡張スルノ工事ヲナスモノトス其場合ハ中野坂田同一ノ歩合ヲ以チ人夫ヲ提供シ費用ヲ負担スルノ義務ヲ有スルモノトス但シ通常工事トシテ春秋二回ノ浚渫ヲナスモノトス

四、通常工事ヲ施シテ尚排水不充分ニシテ中野田地ニ被害ヲ認ムル場合ハ臨時工事トシテ悪水路幅員ヲ拡張シ若シクハ便宜ノ方法ヲ設クルコト

五、排水路以西中野田地ニ潅漑スルニ必要ナル堰留工事ヲ坂田ニ於テ作成スルコト

右契約ヲ遵守スル為メ弐通ヲ作製シ双方壱通宛所持スルモノ也

湊間の内房線の敷設に際しても、最初の設計では木更津から八重原を通り、現在の国道一二七号線沿いに佐貫に貫ける予定であった。ところが、周西および青堀方面から、もっと海岸線に近い路線をという声が起こり、誘致運動が展開され、木更津から周西村に入り、坂田と久保および中野の境界線を通り、大和田、人見を経由して青堀に抜ける現在の路線に変更された。

駅をどこに設けるかも大きな問題であった。各部落から自分の近くに設けてほしいとの要望が強く出されたが、結局、坂田と久保・中野の中間点に当たる現在の地に設置することに決定した。かくして、大正四年一月十五日、周西駅が誕生し、鉄道が開通した。開通当時、冬の周西の野を黒煙をはきながら、重量感いっぱいに走る蒸気機関車を見て坂田の人々は驚嘆の声をあげた。

鉄道の開通により、千葉および東京との時間的距離は大きく短縮されることになった。坂田の人々は、以前よりもはるかに気軽に千葉や東京に出かけ、都会の文明にふれることができるようになった。また、米や麦、そら豆などの農産物をはじめ、明石醤油なども汽車で出荷されるようになり、荷車や船に頼っていた時代と比べると輸送ははるかに便利になり、出荷地域も大きく遠方まで伸びていった。

なお、内房線の敷設によって、坂田地区と中野地区の間に鉄道線路が敷設されることになり、灌漑や排水に関して、種々問題が生じるおそれが出てきた。そこで大正二年四月、坂田区総代人秋元国太郎と中野区総代人はこれらの問題について下段のような契約書を交した。

この鉄道の開通の次に、われわれ坂田の村人の生活に大きな恩恵を与えたのは、家庭

大正弐年四月廿四日

周西村中野区総代人　鈴木　吉兵衛
仝　小松　安太郎
仝　榎本　竹次郎
周西村坂田区総代人　秋元　国太郎
仝　坂井　源次郎
仝　安藤　忠　蔵

電灯の普及である。

東京の鹿鳴館で白熱電灯が点じられたのは明治二十年一月のことである。その後、各地に電灯会社が設立され、大都市から地方へと電灯が普及していく。隣りの木更津では明治四十五年に木更津電灯㈱が配電点灯を行なっているが、これを機に、付近の農村でも電灯架設の動きが強まっていった。そして、大正十二年十二月二十六日、あの関東大震災の年の暮れも押し迫ったころ、坂田をはじめ周西地区に一斉に電灯がともされた。

その頃の電灯はタングステン球であった。普通の家庭の点灯契約は五燭光か一〇燭光を一灯か二灯であった。その晩、村中の家々に一斉に点灯されたとき、子供も大人も眼をまるくして興奮したと古老は語っている。それまでのうす暗いロウソクや石油ランプに比べたら、五燭光といえども電灯は格段の明るさであった。村人たちの喜びようは、今のわれわれにも素直に伝わってくる。

電灯が入ったことによって、子供たちはランプのホヤみがきからは解放された。しかし、その当時は、電気屋はまだなく、電球が切れると、青堀にある電灯会社の出張所まで新しい球と交換にいかなければならなかった。

一方、わが国の郵便制度は、江戸時代の飛脚による手紙の配達にとってかわって、明治四年三月、東京、京都、大阪の間に新式郵便が開設されたことに始まる。明治六年には郵便料金が全国的に統一され、郵便ハガキが初めて発行された。

これに伴い、郵便取扱所や局が開設されたが、君津地区では、明治五年に木更津局が開設されたのを皮切りに、久留里、佐貫、富津、青堀、横田などに次々と開局した。

坂田の近隣では、明治七年三月、釜神一一五〇番地に貞元郵便取扱所が開かれ、坂田

鉄道開通当時の周西駅（大正4年12月26日）

の人々にとっても郵便が身近かなものになった。法木作もそのころ開局したようである。

貞元郵便取扱所は、明治十年、集配三等郵便局に昇格、二十一年には釜神郵便局と改称した。だが、明治四十三年、無集配局となったので、青堀郵便局がその区の集配業務を受け持った。

一方、電信電話業務は、明治二年八月、横浜灯明台役所と横浜裁判所間の約八〇〇メートルが開通したのに始まり、全国に普及していった。君津地区では、明治十七年、木更津村に電信分局が開局、電信の取扱を開始した。その後、明治四十年には、木更津町（明治二十二年町制施行）に銚子に次いで県下二番目の電話が設置された。

坂田近辺では、大正十年、釜神郵便局内に電話機一台が置かれて、電信電話業務が行なわれるようになり、電報の取扱いと呼び出し電話業務が行なわれた。

続いて、昭和六年十二月二十六日、電話交換業務が開始された。この時の電話加入者は十二名で、下段のような人々であった。

戦後の昭和三十一年、釜神郵便局は釜神から中野六二六番地に移った。その後、ほとんどの家庭に電話が普及したことに伴い、四十四年五月、君津自動交換局が生まれダイヤル化されるに至り、釜神局は電話交換業務を停止した。　そのころ、急激な都市化に伴って、昭和四十一年、君津郵便局（普通局）や特定郵便局の南子安局、大和田局が開設され、本来の郵便取扱とともに金融面で広く市民に親しまれている。

■電話開設当初の加入者（昭和六年十二月二十六日）

電話番号	加入者名	住所
釜神一番	釜神郵便局	釜神
二	周西信用販売利用組合	久保
三	鈴木長次	中野
四	周西村役場	坂田
五	坂井四郎治	坂田
六	原　四郎治	下湯江
七	小西与三郎	釜神
八	山中良助	釜神
九	山中菊治	釜神
一〇	保坂亀次郎	久保
一一	高橋喜太郎	中野
一二	中山儀助	釜神

消防組の誕生と関東大震災

明治末年から大正初期にかけて、坂田を中心に周西村の自治は活発になっていった。その頃には海苔養殖もようやく活況を呈し、農業面でも改善がすすみ、半農半漁の生活形態が定着しつつあった。

こうした中で、各種の組織も整備されていった。そしてその一環として、大正初期には消防組が組織された。

八重原村で消防組が組織されたのが大正四年である。それより少し遅れて、大正五年二月、周西村にも消防組が生まれ、本部のほか第一部から第六部までの六部が編成された。これに伴い、坂田は「周西村消防組第一部」となった。

消防組織の誕生に伴って坂田字花の井には消防詰所（夜警所）が設けられた。そこには手押ポンプ、水桶、釣鐘、梯子、鳶口、斧などの消防用具が備えられ、その傍には木柱の火の見櫓も建てられた。そして、村内の防火と消防に大きな威力を発揮した。

消防組が発足して間もなく、関東地方は大災害に見舞われた。関東大震災である。

大正十二年九月一日午前一一時五八分、関東地方を襲ったこの大地震は各地に甚大な被害を与えた。マグニチュード七・九、震源地は伊豆・大島付近だった。折から昼食時とあって、東京、横浜の密集地には火災が発生、未曽有の大惨事となってしまった。

「東京、横浜で発生した火災の煙が空を覆い、坂田の山野にまで灰や紙屑がたくさん飛んで来た。」震災を体験した古老たちは、当時の恐怖がさめやらぬかのように、その体験を語っている。

消防組時代の消防用具

坂田をはじめ周西村内でも建物の倒壊や交通通信施設の被害など大きな損害を被った。当時の周西村役場の文書によれば、周西村の被害状況は次のとおりであった。

周西村の被害状況

(一)住民と建物に関する被害

(イ)住民に関する被害

死亡　男二名

負傷　男二名　女二名

(ロ)建物被害

災害時の村の世帯数　五二〇戸

住宅　全壊　九〇戸

半壊　四八戸

大破　一〇四戸

非住家被害　全壊　一二七戸

半壊　五二戸

大破　一三八戸

一般住民の執りたる処置

応急措置として小屋掛をなし、食品炊出しを行ない、一時を凌ぎ、又各自警戒して災厄の惨を少なからしめたり。損害見積額は約五〇万円と推定。

君津町消防団機械数及び配置表　（昭和28年12月現在　君津町消防団資料）

分団区分	詰所及在地	自動車	三輪自動車	手挽ガソリン	小型動力	腕用	購入年月日
本部	君津町久保						
第１分団	三直			1			昭20年９月
2	内蓑輪					1	大10年８月
3	外箕輪					1	大14年１月
4	杢師				1	1	手挽 昭20年１月　腕用 大15年３月
5	南子安			1		1	手挽 昭27年12月　腕用 大８年
6	北子安			1		1	手挽 昭26年７月　腕用 大14年２月
7	久保			1		1	手挽 昭27年12月　腕用 大15年
8	中野	1				1	自動車 昭27年12月　腕用 大５年２月
9	坂田		1				（手挽 昭３年）　三輪車 昭26年５月
10	大和田	1		1		1	自動車 昭28年８月　腕用 大６年１月　手挽 昭20年９月
11	人見			1		1	手挽 昭14年８月　腕用 不明
12	人見	1				1	自動車 昭20年11月　腕用 大14年
13	台					1	腕用 昭22年10月
計		3	1	6	1	11	

(ハ)村に所在する官公衙の被害

建物の被害

周西小学校　全壊

役場庁舎（坂田）半壊

駐在所（大和田）大破

隔離病舎（人見）全壊

吏員の負傷　二名

小学校児童は、坂田長福寺、人見青蓮寺の寺院を修繕し収容授業をなす。

役場は坂田漁業組合事務所を借りて執務せり

学校役場の器具器械類は大破して用をなさず、書類は完きを得たる程度なりき

(ニ)神社寺院の被害

人見神社　全壊

大蓮寺、長安寺　全壊

青蓮寺、長福寺、増光寺、大雲寺　大破

(ニ)周西小学校の被害

建物は本校舎、雨天体操場、裁縫室、物置等全部倒壊して惨状目もあてられず、幸いに放課後なりしを以て職員及び児童数名居残りたるも死傷者なし

建物被害見積額　四五、〇〇〇円

教具教材被害見積額　三、〇〇〇円

授業は九月十日より前記寺院に於て開始す。

■君津周辺の被害状況（『君津町誌』による）

村	現住戸数	死亡	負傷	住家 全壊	住家 半壊	被害千分比	非住家 全壊	非住家 半壊
八重原	四三九	一	一	六六	八六	三三四	七四	一〇一
周西村	五二八	二	七	九〇	四三	二五二	一二二	五一
周南村	四七三	・	一	一一八	三九	一一六	二六	三七
貞元村	四二八	五	四	一二二	四八	三九七	一二七	一五一

村	役場 全壊	役場 半壊	学校 全壊	学校 半壊	社寺・工場その他 全壊	社寺・工場その他 半壊
八重原	・	・	・	・	一〇	七
周西村	・	一	二棟	・	五	一
周南村	・	・	・	・	・	・
貞元村	一	・	三棟	・	三	二

(二)交通通信被害

(イ)村道路、橋梁及び鉄道等交通関係被害と応急措置

人見山の大崩壊により道路及び小糸川の流水を止めたるは最も恐るべきものにして一朝出水あらむか震害に加ふるに水害を受けるがごとき場合は、その惨状想像するだに戦慄を禁ずる能はず。故に之が掘鑿工事は一日も忽せにする能はざるを以て全力を之に注ぎ、青堀町と共同之に当ることとせり。

之が工事に際しては、村内消防組員、在郷軍人分会員、青年団員の労働奉仕によりたるは勿論、遠く県内在郷軍人分会より援助を与えられ、尚軍隊より警備のため出動ありたるを以て当時の状況を想像し得べし

(ロ)郵便電話の被害

電柱の倒れたるもの、電信の切断されたるもの数多し

すなわち、周西村でも周西小学校が倒壊したのをはじめ、建物多数が全・半壊し、二名の尊い犠牲者を出したのであった。とりわけ、人見山のガケ崩れによって小糸川が堰止められ、出水による水害の恐れがあり、消防組員をはじめ在郷軍人会などが中心となり、村人総出でその開さくに当たったというのである。

この時、坂田でも長福寺が大破、また初津正之助宅内の村役場庁舎が半壊するという被害を受けたが、それを除いてさしたる被害がなかったのは不幸中の幸いであった。

この震災の災害復旧に坂田消防組は大活躍をしたが、それを一つの契機として、内容を一層充実させた。そして昭和三年には、坂田は周西村で初めて手引動力ポンプを購入

し、近隣の消防組から注目された。その時の第一部長（坂田）は苅込和三郎で、副部長には平野久三郎と安藤伊之助があたっていたが、手引動力ポンプの購入で消防組員の志気はますます高まったのである。

その後、昭和十四年四月、戦時体制強化の一環として、消防組は周西村消防団に改組され、六分団編成とし、本部を別に置いた。さらに昭和十八年四月には、八重原村と合併し君津町が誕生するに及び、君津町警防団となり、そして組織は本部および十二分団編成となった。

周西村役場の新設

周西村役場は、明治二十二年の周西村の発足以来、坂田八五八番地の初津正之助宅母屋の一部を借り受けて、役場事務を遂行してきた。しかし、明治から大正へ、そして昭和へと時代が変遷する中で、役場事務も次第に増大し、新たな役場の建設が強く望まれるに至った。

その結果、昭和七年三月二十六日、坂田七三七番地、水越清所有の水田を埋め立てて新庁舎を建築し、移転した。村長は榎本政吉であった。

学校や役場などを建設する場合、その位置をめぐってどこの町村でも部落の利害関係などがからみ、はげしい抗争が演じられることがよくあるが、この周西村役場の新庁舎建設についてもなかなかの議論があったようである。水越家の真ん前の苗代田に決まったのは「そうした抗争の折衷案がしからしめたもの」と、それに関係した長老は語って

昭和15.6年ごろの周西村役場吏員

いる。

庁舎は木造平屋建で、村長室は応接間を兼ねた個室となった。村会、各種団体の会合などのために立派な会議室も整えられた。そこには歴代村長の肖像画が掲げられ、近隣の町村でも自慢の役場だった。玄関前には多行松の大株が二本植えられ、敷地の周囲は上手でかこわれていた。電話も釜神四番として新規加入され、通信の便のよさも話題にのぼった。この新役場の完成を祝って、花火が打ち上げられ、天神山村不入斗の「踊り芸人」たちが舞台を張って、踊りや芝居を演じて観衆たちを楽しませた。

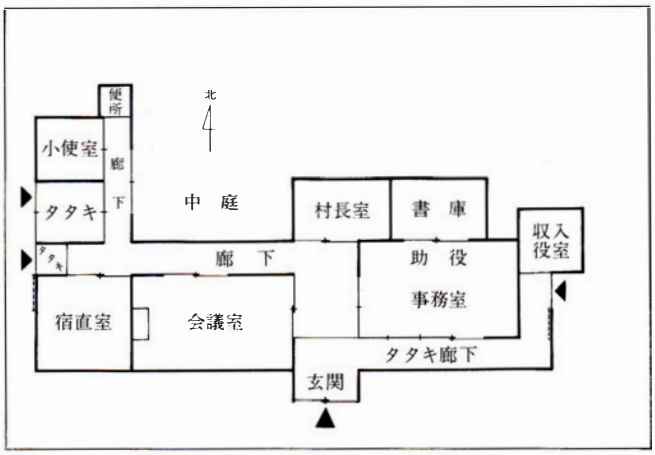
その前後の周西村の状況をみると、昭和十年ごろ、戸数五五〇戸、人口三一〇〇人である。村の財政規模（予算）は二～三万円、役場職員は村長以下七～八名で、村治の執行機関としての役目を果たしていた。ちなみに職員の給料は月額三〇円から五〇円といったところ。仕事の中でとりわけ重要だったのは、租税の徴収だった。

当時の職員だった某氏はこう語る。

「徴税令書はロール半紙というすべすべした紙にガリ版刷りされ一戸ごと配って歩いたものでした。税の種類は営業税、地租、家屋税、営業税附加税、地租附加税、戸数割税といったものはまあ普通です。なかには自転車税、荷車税といった変わり種もあった。荷車税は大車、中車、小車に分かれていて、役場でそれぞれ焼印を車体に押して区別していました。

月税としては理容者税、酌婦税、雇婦税など。季節的な税金では扇風機税というのもありました……」

督促状には赤紙が使用された。督促手数料は一律一〇銭で、本税より高くつく場合も



新築移転後の周西村役場間取図

あったという。

また清潔法という法律が施行されていて、それも役場職員たちの仕事であった。今流にいえば予防衛生を指すのであろう。それは春秋二回、各部落ごとに日を定めて実施された大掃除のことであった。当時は伝染病の疫痢が流行し、高熱を出して手遅れとなり幼児たちの死亡率が高かった。一方、豚コレラの発生も多く、豚舎の消毒、豚の薬殺なども多く見られ、予防衛生はおろそかにできない時代だった。

大掃除は好天の日が選ばれ、各家庭では庭にムシロを敷いて畳を〝八〟の字に立てかけて干し、家中を清掃する。役場の職員は、駐在所の巡査、区長とともに各世帯の大掃除ぶりを点検して回り、一軒一軒の戸口の柱に「春（秋）季清潔法施行済」と印刷した紙片を貼り付けて歩いた。また年に一度は衛生思想普及のための活動写真会を小学校の講堂で開き、村人たちを集合させた。こまごまとした仕事は数限りなくあったが、第二次世界大戦以前の周西村役場は平和な時を送っていたのであった。

日中・太平洋戦争と君津町の誕生

中国大陸の満州で事変が起こったのは昭和六年の九月。このときの一発の銃声は、やがて破局の第二次世界大戦へ通じる道であった。そして坂田の青年たちにも未曽有の不幸をもたらすことになった。軍事色が濃厚になってくると政府は、青年訓練所と実業補習学校を合体させ、全国で一斉に「青年学校」（昭和十一年十月一日）を開設することになった。勤労青年たちはここで厳格な軍事教練を強いられ、一歩一歩、軍国主義思想を鼓

■青年学校

昭和十年（一九三五年）の青年学校令に基づいて全国市町村に設立された青少年の教育機関。小学校修了後の教育機関としては、従来、中学校のほか、実業補習学校と青年訓練所があったが、後二者を統合し、市町村ごとに設置された。当初は、普通科二年、本科五年（女子三年）、研究科一年で、皇民教育を行なうことを目的としたが、日華事変以後は軍事教育中心となり、昭和十四年には、尋常小学校終了後七年間の義務制となった。しかし、戦後の昭和二十二年、学校教育法の公布に伴い廃止された。

吹されていったのである。

地元主婦たちによる周西村婦人会も、昭和九年には大日本国防婦人会に改組され、「銃後の守り」をかためることになった。

十二年七月七日には北京郊外の芦溝橋において、日本は中国と全面戦争に突入した。日中戦争の勃発であった。その後戦火は中国全土に飛び火して、戦いはとめどなく拡大していった。

第一回の召集令状が周西村役場に飛び込んできたのは十二年の七月二十三日、蒸し暑い真昼のことだった。召集人員は八名。年齢はおおむね三五、六歳の壮年兵であった。軍部は現役兵師団を対ソ戦に備えて満州に配置しておくために、他の中国戦線へは予後備兵を大量に召集、派遣したのだった。

このとき坂田では石渡春吉（旧姓栗原）に赤紙が来て、他の召集兵とともに、八月二日、近衛師団に応召した。その後、追いかけるように、広部徳治が応召していった。

やがて、日中戦争の長期化とともに、坂田から出征兵士も増加して、有為の青年たちが次々と応召していった。それとともに、戦時統制は大幅に強化されていった。昭和十四年四月には、かつての消防団が国防体制に組み込まれ、警防団と改称した。また、昭和十五年九月には、内務省の通牒によって市町村の末端組織として部落会が組織され、同時に、町内会、隣保班、常会なども結成された。これらの組織によって、総動員体制は日本のすみずみにまで行きわたることになったのである。

そして昭和十六年十二月六日、日本軍の真珠湾奇襲攻撃によって太平洋戦争が勃発した。日本は緒戦での奇襲攻撃の成功や南方の現地軍を打破した勝利に酔い、戦線をさらに

■農繁期の臨時託児所

日中戦争時代から太平洋戦争時代、坂田の青壮年は次々と戦場に応召し、海や田畑は老人と婦人たちの手で守らなければならなくなった。このため、坂田銃後奉仕会では、婦人たちが労働に専念できるように、農繁期に限り臨時託児所を開設し、約一〇日間、村中の児童たちを預った。

坂田農繁期託児所（昭和14年７月７日）

拡げた。

だが、戦局がすすむにつれて輸送線は滞って、物資は欠乏した。当初から考えられていたことだが、彼我の国力の差はいかんともなしがたく、連合軍は着実に戦力を整えて反撃に転じるや、もう日本勢の敵ではなかった。開戦半年にしてたちまち形勢は逆転、昭和十七年六月、ミッドウェー島の攻略に失敗してからのその後の日本軍は撤退につぐ撤退、玉砕につぐ玉砕がつづき、やがて日本の敗北は決定的なものとなっていく。

戦局の重圧が色濃く坂田の人々にひしひしと迫ってきたのは、昭和十五、六年ころからであったろう。

われわれの身辺から、あの顔、この声の多くの青少年が故郷をはなれていった。坂田八幡神社で武運長久を祈願し、勇壮で悲愴な軍歌や歓呼の声、長い行列におくられて、小さな周西駅のプラットホームから愛すべき母や妻子を残して去っていった。

坂田の青年たちは内地の兵営、外地の戦場、あるいはまた軍需工場へあわただしく動員されていった。遠く中国大陸、ビルマ、ルソン、ニューギニア、ガダルカナルなどへ赴いていった。愛国精神が旺盛だった当時の青少年たちは、祖国のために身を挺することをいとわなかった。貴重な青春の身をすりへらし、ひたすら祖国防衛の信念に燃えてひたすら戦った。祖国の勝利を祈念しつつとはいえ、砲煙弾雨のなかで、純真な若者たちがなぜ地獄絵を見なければならなかったのか。

青年たちが第二次世界大戦の戦士として応召して行ったあと、周西村には二つの大きな出来事があった。その一つは、昭和十七年から二十年の三年間、忽然と姿を現わし、敗戦のどさくさとともに消えてしまった「第二海軍航空廠八重原工場」であり、もう一

■八重原工場（第二海軍航空廠）施設概要

鈑鍍金工場　光学兵器仕上工場
第一爆撃工場　製図工場
車輛工場　発動機置場
整備工場　配給所
治具工場　物品納入場
木型工場　守衛本部、第一～第五守衛詰所
軸承工場　第一札場
熱処理工場　第二札場
機械工場　第一汽缶場
電気工場　燃料庫
鋼工場　発動機防音運転場
事務所
工員養成所…校舎、実験場（機械、仕上、木工）、寮食堂、番舎、舎監宿舎。
第一工員宿舎…六棟、舎監副舎監宿舎、従業員宿舎、烹炊場、食堂、浴場、汽缶場。
第二工員宿舎…三棟、舎監副舎監宿舎、従業員舎、烹炊場、浴場、汽缶場、倉庫、病舎。
第三工員宿舎
工員住宅（台住、東前）
会議所、官舎（高坂）
丁号官舎（北子安）
病院（本師）…理学的治療所、外来本館手術所、第一病舎、第二病舎、隔離病舎、病理検査場。

つは、それとからんで、昭和十八年四月、周西村と八重原村が合併し、君津町が誕生したことであった。

太平洋戦争たけなわの昭和十七年四月十七日、木更津海軍航空廠岩本中将は、周西村の久保および台、八重原村の杢師、南子安、北子安の五部落にまたがるおよそ一〇〇ヘ

■歴代君津町長・君津市長

就任年月日	氏名	備考
昭和18年4月1日	保坂亀次郎	
昭和18年5月30日	保坂亀次郎	
昭和20年10月19日	川名　隆	
昭和21年11月19日	広瀬　清助	町長臨時代理者、坂田出身
昭和22年4月5日	鈴木　誠一	公選
昭和26年4月23日	鈴木　誠一	
昭和29年3月31日	剱持小一郎	3月31日君津町、周南村、貞元村合併、町長職務執行者
昭和29年5月7日	鈴木　誠一	
昭和32年8月27日	岸　周治	
昭和36年8月7日	鈴木菊治郎	
昭和40年8月7日	鈴木　俊一	
昭和44年8月6日	鈴木　俊一	
昭和45年9月28日	鎌田　賢次	君津町、小糸町、清和村、小櫃村、上総町合併、町長職務執行者
昭和45年11月1日	鈴木　俊一	
昭和46年9月1日	鈴木　俊一	君津市制施行、以後現在まで在任

■歴代君津町・市助役

就任年月日	氏名	備考
昭和18・4・1	村田　武次	助役臨時代理者
〃18・8・31	村田　武次	
〃21・2・23	広瀬　清助	坂田出身
〃22・10・6	村田　武次	
〃26・10・8	村田　武次	
〃29・3・30		三町村合併
〃29・5・29	石井　栄禅	
〃33・12・11	高橋　敬	
〃37・12・11	高橋　敬	再任
〃39・12・21	杉浦　明	39・7・9死亡
〃43・12・24	長島　昇	45・9・27退任
〃45・9・28		五カ町村合併君津市制施行
〃46・9・1	四宮喜八郎	49・12・1退任
〃50・6・2	倉本　晶弘	

■坂田選出君津町議会議員（昭和18・5～29・9）

氏名	就任年月日	退任年月日
坂井音三郎	昭和18・5・15	昭和22・4・29
坂井四郎治	〃18・5・15	〃21・12・31
平野　與吉	〃22・4・30	〃26・4・29
広瀬　清助	〃22・4・30	〃26・4・29
秋元　武	〃22・4・30	〃23・12・31
平野　秋藏	〃26・4・30	〃29・3・30
広部　春吉	〃26・4・30	〃29・3・30

クタールの土地に、兵器、発動機工場を建設する旨を両村長に通達した。それ以前、この一帯はこの地方でも有数の美田であったが、戦時下のこととて、有無をいわさず強制収用し、通達後一〇日目には早くも着工、徴用工員二五〇名を含め、軍民あげて工場建設をすすめた。そして、間もなく一部操業を開始、その後も増設工事を推進した。

この八重原工場の建設にからんで、周西村と八重原村が合併することとなり、昭和十八年四月一日、両村の合併が実現、「君津町」が発足した。この合併も、戦時下の中央統制強化のための半強制的なものであったが、両村の合併により「君津町」はその第一歩を踏み出したのである。

初代町長には保坂亀次郎が就任した。戦時下の市町村の行政権限は極度に縮少されていた。その「首長」の選出に対する規制もすべてが中央統制が加えられていた。すなわち、市長については内務大臣が当該の市会に候補者を推せんさせ、勅裁を得て選任し、一方、町村長については町村会で選挙したものを府県知事が認可するというものであった。

君津町の誕生により、新しい町会議員の選挙が行なわれ、坂田から坂井四郎治（襲名以前は豊三）、と坂井音三郎の両名が選ばれ、戦時下の君津町の行政に参画した。

敗戦と坂田の英霊たち

君津町が誕生した昭和十八年四月には、すでに戦局はわが軍にきわめて不利に傾き、連合軍の対日包囲網は次第に狭められてきた。そして、戦局の急迫化とともに応召者は

■坂田選出君津町議会議員（昭和29・3～46・9）

《29年9月30日君津町、周南村、貞元村合併、君津町新発足》

氏名	就任年月日	退任年月日
平野　秋藏	昭和29・3・31	昭和29・9・30
広部　春吉	〃29・3・31	〃29・9・30
秋元　理平	〃29・10・1	〃33・1・11
平野　秋藏	〃29・10・1	〃33・1・11
秋元　聰	〃33・1・31	〃33・9・30
秋元　聰	〃33・10・1	〃37・9・30
平野　秋藏	〃33・10・1	〃37・9・30
秋元　聰	〃37・10・1	〃41・9・30
水越　曠	〃37・10・1	〃41・9・30
坂井　五郎	〃41・10・1	〃45・9・27
平野與志雄	〃44・8・6	〃45・9・28

《44年9月28日、君津町、小糸町、清和村、小櫃村、上総町合併、君津町として新発足》

氏名	就任年月日	退任年月日
坂井　五郎	昭和45・9・28	昭和46・8・30
平野與志雄	〃45・9・28	〃46・8・30

■坂田選出君津市議会議員

氏名	就任年月日	退任年月日
坂井　五郎	昭和46・9・1	昭和46・9・18
平野與志雄	〃46・9・1	〃46・9・18
坂井　五郎	〃46・9・19	〃50・9・20
平野與志雄	〃46・9・19	〃50・9・20
坂井　俊雄	〃46・9・19	〃50・9・20

急増、適齢期の青壮年には次々に召集がかけられ、戦場へと動員されていった。それとともに昭和十八年七月には国民徴用令が改正され、国内態勢強化のための戦略産業への国民の徴用が強化された。さらに同年十月には学徒動員が始まり、翌十九年一月には緊急学徒勤労動員方策要綱、緊急国民勤労動員方策要綱が定められ、本土決戦に向けての動員体制の強化が図られた。

しかし、マリアナ沖海戦(十九年六月)、レイテ沖海戦（同年十月）と二つの海戦で日本海軍は連敗し、連合艦隊はその主力を失い、太平洋の制空権は米軍のにぎるところとなった。そして、それと同時に、米軍機による本土空襲が本格化し、主要都市や軍事施設が米軍機の爆撃にさらされることになった。とりわけ、二十年三月十日には、B29を主力とする米軍機の爆撃によって、首都東京の主要部分は壊滅的な打撃を受けた。

君津町でも、木更津に隣接していたことや航空廠が所在していたことから数次にわたる米軍機の襲撃を受け、航空廠はもとより、周西駅、高坂官舎が艦載機による銃撃を受けて被弾した。このほか坂田では、安藤豊作、平野治二、坂井武次宅や国道一六号線が銃撃を受けたが、人命には異常がなかった。

八重原工場は度重なる爆撃を受けたため、同工場の工員たちは長福寺や漁業協同組合事務所をはじめ、いくつかの民家に分宿することになった。村人たちは、自分たちの生活も苦しい中で、進んで協力し、工員たちの世話にあたった。工員も村人も日本を守るために身命をかけており、わけへだてはなかった。

昭和二十年八月十五日正午、ラジオ放送によって炎天の夏空に天皇の「終戦宣言」が虚しく流れた。ポツダム宣言の受諾により日本は無条件降伏、戦争は終わった。阿修羅

平野與志雄	〃 50・9・21	〃 54・9・22
坂井　俊雄	〃 50・9・21	〃 54・9・22
平野與志雄	〃 54・9・23	〃 在任中
坂井　俊雄	〃 54・9・23	〃 54・10・31 死亡

■日支事変・太平洋戦争戦没者たち（戦没年月日順）

戦没者氏名	生年月日	階級	戦没年月日	戦没区分	戦没場所
広部徳治	大3・8・29	陸軍伍長	昭13・7・19	戦病死	中国徐州病院
有野文蔵	大3・7・1	陸軍二等兵	昭14・9・2	戦死	佐倉歩兵第57聯隊
坂井一郎	大11・3・18	陸軍兵長	昭18・9・5	戦病死	中国済南陸軍病院
青沢清	大3・1・26	陸軍伍長	昭19・5・15	戦死	ニューギニア方面
広部萬次郎	昭3・10・3	海軍軍属	昭19・7・4	戦死	小笠原諸島
有野長松	明37・3・4	陸軍伍長	昭19・8・4	戦病死	ビルマ方面
平野晋太郎	大9・6・21	陸軍曹長	昭20・1・3	戦死	モロタイ方面
牧野晃	大10・6・28	陸軍伍長	昭20・1・5	戦死	ルソン島マニラ地
色部行男	大10・12・2	陸軍上等兵	昭20・1・24	公務死	本籍
有野登	大7・8・14	陸軍軍曹	昭20・2・4	戦死	ビルマキヤウセ
色部浄	大3・1・13	陸軍伍長	昭20・3・10	戦死	ルソン島パタンガス州サントトーマス
石渡春吉	大4・3・2	陸軍上等兵	昭20・3・16	戦病死	中国武昌第159兵站病院
井祐弘	大11・11・9	陸軍曹長	昭20・4・7	戦傷死	中国湖南省安仁県彰蟲村
苅込常次郎	大12・4・10	陸軍兵長	昭20・5・20	戦死	ルソン島ルサール州モンタルバン
秋元忠三郎	大2・3・11	海軍二曹	昭20・6・15	戦死	比島ウミライ北方
安藤誠	大13・12・28	陸軍上等兵	昭20・7・20	戦死	中国山東省長山県夫村
安藤仁	明44・8・22	陸軍上等兵	昭21・1・4	戦病死	中国南京第156兵站病院
坂井徳郎	大15・6・17	陸軍兵長	昭21・12・23	公務死	本籍地
井祐清	大9・1・10	陸軍軍曹	昭22・9・21	戦傷死	本籍地

■太平洋戦争の戦時動員と損害

敗戦のとき、日本陸海軍の総兵力は七二〇万人に達した。のべ一〇〇〇万人が兵士として戦争に参加した。これは日本男子の総数の四分の一、ほぼ二世帯に一人強の出征兵士を出したことになる。

- 戦死・行方不明者（直接戦場で失なわれた兵士の生命）　約二〇〇万人
- 非戦闘員の死亡（空襲、原爆、沖縄、満州などで死亡した数）　約一〇〇万人
- 傷病軍人　三〇万人以上
- 戦災・焼失家屋　約三一〇万戸
- その羅災人口　約一五〇〇万人
- 徴用工として軍需産業にかり出された者　約三〇〇万人
- 学徒生徒勤労動員　約三五〇万人
- 女性工場動員数　約三〇〇万人
- 内地部隊軍人　約四〇〇万人
- 敗戦によって国土面積の四六％の領土と物の損害　約六四二億円。昭和十年と比較して国富の四分の一を失った。

にされた青年たちの頭上には勝利の栄光はついにやってこなかった。

坂田の青年の多くは、悪夢からさめたように故郷へ帰ってきた。しかし、一五名の男子たち、彼らはその亡骸の一片すらも坂田には立ち帰らなかった。

戦争とはまことに悲惨で非情な、そして不合理なものであった。しかし、冷静に思いめぐらせれば、祖国のために一点の疑いもなく死地に赴いた若者はもう神の名に値いする。

戦後三十六年を経た今日、生き残っているわれわれは、ついに還ることのなかった人人、兄弟、友だちの無念さを想い、二度とふたたび誤れる戦争をくりかえさないと誓うのみである。あの残酷さ、愚かさを決してわれわれの脳裏から風化させてはならない。簡単に忘れ去ってはならない。ここに戦没者諸兄の芳名を記して慰霊の証しとしたい。